

平成20年度 第1回豊田市生涯学習審議会 会議録

【日 時】 平成20年7月8日(火) 午後2時～午後4時

【場 所】 豊田市役所 団体会議室

【出席者】 (委 員) 釘宮順子 (市民活動団体 フリースペースK代表)
久米昭次郎 (市民公募委員)
甲村敬司 (青少年健全育成推進協議会)
清水智子 (小学校読み聞かせサークル)
鈴木八枝子 (交流館長代表)
田中清恵 (子育てネットワークの会ふじおか)
藤嶋正美 (学識経験者)
牧野 篤 (東京大学大学院)
松浦 崇 (市民公募委員)
松元秀喜 (市民活動グループ)
山中裕二 (小中校長会)
吉田允昭 (学識経験者)
(事務局) 村山志郎 (社会部長) 田口厚志 (生涯学習課長)
天野正直 (自治振興課長) 柴田徹哉 (生涯学習課副主幹)
中根裕之 (生涯学習課係長) 竹内未帆 (生涯学習課主査)
(欠席) 斉藤秀平 (名古屋商科大学教授)
福島紀美 (学識経験者)
森 睦 (豊田市区長会)

【次 第】 1 あいさつ

2 議 事

- ・平成20年度 生涯学習行政の概要について
- ・生活文化(ひとの暮らしぶり)に着目した過疎地域の調査研究について
- ・平成20年度 豊田市生涯学習審議会の開催予定について

3 連絡事項

- ・平成20年度 愛知県社会教育委員連絡協議会の各種研修会等の開催日程について

【議事の摘要】

1 あいさつ

会 長：こんにちは。今回から、新任の委員もいらっしゃいますが、県外に転出された委員も引き続き審議会に出席いただいています。みなさんのご意見をいただきながら、豊田市の生涯学習がさらに前進するようご審議いただきたいと思います。

部 長：今年一年よろしくお願いいたします。豊田市は市町村合併をして3年が経過しましたが、依然として文化の違いや意識のずれも残っています。合併の契機は山間地域から都市部までを一つの生活圈域としてそれぞれの持ち味を活かして豊かな選択肢のある地域を作ろうということでした。そして、もう一つは、自立した

市民社会をつくりあげることでした。市民誰もが自ら世の中の動きを見て、何が次の時代に必要なかを考えて行動できるようになれば、社会の難局を乗り切れるのではないかとということで、これまで市民の力の向上に努めてまいりました。市民が自立し、自らの責任で課題解決の道筋を切り拓くことができるようにするための支援が生涯学習の形だと思っています。地域が決めたことを行政が実行し、地域が自己責任・自己決定するのと共に行政の仕事を見直す、ということをめざしていきたいと考えています。まだたくさんの課題がありますが、典型的なものとしては本日の議題にもありますが、過疎の問題があります。今年一年、皆様からの多様な意見をいただきながら、行政の偏った判断に陥らないよう努めてまいりたいと思います。よろしく申し上げます。

2 議 事

(1) 豊田市生涯学習行政の概要について

事務局：資料をもとに説明。

委員：「高齢者」と「高年齢者」の表現の違いは何ですか。

事務局：高齢者は65歳以上、高年齢者は55歳以上を目安に使い分けています。

委員：ものづくりサポーターの募集はどのように行っていますか。

事務局：広報とよたやホームページ、ちらしなどです。

委員：過去に集めた地域講師の活動の場はどうなっていますか。前林地区では堤小学校と連携したものづくり支援活動を既に行っていますが、地域講師名簿に登録しただけで活用される場がないという声も聞いています。思いがある人を活用する場について、検討してほしいと思います。

事務局：ものづくりサポーターは、学校のものづくり教育を支援する人たちです。竹とんぼ・凧揚げ用の凧づくりなどのメニューごとにグループを作って活動します。

委員：前林は地域講師の活動が進んでいる地区で、講師はものづくりだけでなく、学校での連携もとりながら実施しています。特に前林地区は学校のキャンプなども入り込むなどの連携があり、良い連携だと思います。ものづくりサポーターとの連携は進める中でやっていければよいと思います。

事務局：地域講師は、学校週5日制や総合学習の導入の際、名簿の収集を行いました。その活用については課題があると承知しています。交流館の現場とのやり取りを行う中で、検討していきたいと考えています。

会長：既存の仕組みとの連携の配慮をお願いしたいと思います。

(2) 生活文化（ひとの暮らしぶり）に着目した過疎地域の調査研究について

事務局：資料に基づき説明。

会長：調査地区は具体的にどこを考えていますか。

事務局：藤岡は別として、合併町村では過疎化の傾向がありますが、今のところ、旭地区・小原地区・稲武地区を考えています。

会長：限界集落とはどのようなことをさしているのですか。

事務局：限界集落というのは、通称です。愛知県の調査でも、小規模高齢化集落という名称が使われています。この定義は、100人未満の集落で、人口の中で65歳以上の高齢者の占める割合が50%を超える地区のことです。

会長：過疎を勉強することも大事だと思いますが、生涯学習課との関わりはどのようなのですか。

事務局：過疎化が進めば地域活動は衰退してきます。地域活動の支援は交流館の担う役割ですので、自治振興課・生涯学習課の2課が共同で調査を実施します。

委員：合併町村はまだ交流館が活発に活動しているわけではないので、今回の調査グループが交流館と一緒に調査というのは難しいように思います。

豊田市から30分通勤圏内でも過疎化が進む要因として、町村地区では高校が近くにないために、やむを得ず下宿するような状況もありますし、合併によって交通が便利になったこともあるのではないかと思います。

事務局：確かに、交通が過疎に影響していることもあります。また、実際に、過疎化が進むのは高校進学段階からです。稲武の例を出すと、足助高校に行くのか旧市内の高校に行くのかの選択肢になってしまいます。旧市内に行くとなると、下宿をする率が高く、地元を離れることで戻らない子どもが出てくるということはあると思います。昨年度からおいでんバスができて、通学のための選択肢が増えたことで、多少状況は変わるかもしれません。

委員：町村地区は女性がいろいろな活動の事務局をやっていることも多いですし、ネットワークが豊富なので、調査対象にぜひ女性を入れていただきたいと思います。調査対象の若年者はどこをねらいますか。

委員：歳を重ねると、自分の体が弱っていくことに対してさびしさ、おそろしさを感じて話し相手・頼る相手がほしくなります。安心感をどういうことに感じるのかを考えてみると、子どものころにやったことや、歩いて学校に通っていたころの記憶だと思います。通学するのにバスで送られ、学校で暮らして、バスで戻ってということだけで地域の自然が記憶に残るか疑問です。過疎を調査するときには、人が年をとったときに何が残るのかを考えないといけないと思います。過疎地では、人はいなくても空気がいいというのは変なたとえですが、高齢者が何に満足しているのかからも探りを入れ、魅力を引き出していきたいと思います。

委員：今、東京では自殺が増えています。秋葉原事件のときにもいわれたことですが、今の社会には、人間関係に追い詰められたときに行き場がないのではないかとということがあって、都市が健全に機能するためには農山村がいるのではないかとというのが議論されています。例えば、ノートにしても、都市で数年滞留していても、地元に戻って行って、中学校の人間関係に戻ってご飯を食べられるようにしてもらっている子がいます。帰る場所がある子は帰れるのですが、田舎が壊れてしまうと帰れなくなります。人間が生きるために、ある意味逃げ場として、自分を元に戻す場が田舎なのではないかと思います。

過疎地というと東北山陰のイメージがありますが、東京都内でも多摩ニュータ

ウンなど都市近郊のニュータウンが過疎化していて対処が必要な時代になりつつあります。地元というあり方を考え直す時期にあるということもあり、この調査に関わらせていただこうと思っています。

具体的な調査手法としては、過去の間人関係について、高度成長期、経済構造の変容が始まったくらいからお話を聞かせていただきたいと思います。

そのほかに考えていることでは、女性からの情報収集についてで、飲み屋のおかみさんなどは地域についての情報を幅広く持っていたりします。若年者層については、地元でがんばっているJC青年部などからの聞き取りを考えています。ネットワーク分析、要因分析ですが、そういう話に持っていければと思います。地元との人間関係も必要になってきますので、調査は日帰りではなく、泊まりがけで行おうと思っています。

平成17～18年度調査で旧市街地の交流館と関わったときに分かってきたことですが、自治会の組レベルが壊れて機能しない地区がでてきているので、自主的な活動を支える小さい活動をどう再建するのかを考えなければならないと思っています。交流館や出先の自治会館、そうしたネットワークも考えていかなければならないと思います。

また、学校の問題ですが、学校の先生の発想では適当な規模が必要だということをおっしゃいますが、そんな規模は過疎地域ではとても建てられません。規模がないと社会性が養えないと言われますが、子供だけで規模がないなら運動会は地元全体でやるので、社会性は養われますし、子どもは子どもだけでなく大人も含めて社会に関わっている感覚が養えると思います。これ以外にも、学校が地域にあることでできる人間関係というのがあると思いますので、合理性だけで判断するのではなく、学校は規模が小さくても残す必要があるのではと思います。

委員：私は、市内に住んでいますが、町村部では人間関係が難しい面もあって、田舎に行くほど因習が強いので、土地になじむのが大変ということもあります。若者が仕事につけないとはいえ、仕事を選ばなければあると思いますので、人の分析だけ行っていても過疎の対策は難しいと思います。また、年取るほど都会の方が便利だと言うことがありますので、もともとそこに育っていた人が帰るということはあっても、住んだことのない人が突然町村部に行くのは難しいと思います。

委員：教育委員会では、合併地域の学校適正規模について、特別検討委員会を持ち、議論してほぼ答申が決まりつつあります。適正な規模は、学校現場で過ごした人間は同一学年複数学級ほしいと思いますが、そういうこととは別に学校の果たす機能はそれだけでないという話がありますので、複数学級の必要性自体を疑ってかかることさえ必要という意見はもっともです。建物があるだけでコミュニティセンター的役割を果たすし、僕の帰れるところという役割を果たすこともあります。教育委員会の動きも見ながら進めていただきたいと思います。

現在、豊田市史を作るプロジェクトがあり、概要版をさきにつくることになっていますが、私は現代編を担当することになりました。執筆に当たっては、合併

後の状況を受けて、地域を浮き彫りにさせるような内容で考えてくれという注文を受けています。例えば、「名水百選 水のふるさと 旭町」のようなタイトルを考えていくことになるわけです。当然のことですが、過疎地域もそれぞれ歴史があり現在があるので、全ての地域を一緒にしては議論できません。過疎であれば過疎であるほど、地域を浮き彫りにする必要があると思います。

委員：一年でやる調査に、地元が本音で関わってくれるのかと思うのですがどうでしょうか。

委員：ネットワーク分析は私的なプライベートの話を書くわけではなく、話しにくいことまで踏み込んで聞くものではありません。この調査とは別件で、小原の工芸和紙をロシアのバイヤーに紹介し、小原の伝統和紙でロシア人の嗜好性にあった作品をつくるという活動をしていますが、ロシア向けの工芸和紙はとても好評だったということです。ロシアの人たちは、小原の和紙を見ることで、小原の生活が見えるのだそうで、そこに価値を見出されているのだそうです。こういう活動も紹介しながら、過疎地だけれども元気があるという状況を作っていければと思っています。

委員：調査対象区域から転出した人に、なぜ出たかを聞くことも意味があると思いますので、できれば調査に加えてほしいと思います。

事務局：この調査とは別の調査で予定していますが、転出者の追跡調査が難しく、市の職員くらいしか調査できません。

委員：若林交流館と足助地区とで交流する機会があります。先日、足助のコウロゲ地区に行ったが、人間関係を地主の方が保っておられて、惣菜をつくとみんなのところへ届けてあげたり、運転手をされたり、といった暖かい関係が見受けられました。よそから見てもいいネットワークがつくられていると思います。

委員：不登校の子に対する活動をしている方から聞いた話ですが、下山地区では合併後、書類がやたらまわってくるようになり、前のようにいろいろと決められなくなったと言う話を聞いています。

会長：過疎調査は、提言まで踏み込みますか。

事務局：これまでずっと過疎対策はやっていたが、特効薬がありませんでした。提言につながればと思っています。

委員：藤岡地区では人口が増えていますが、図書も手狭な感じがしますし、住民は猿投の方に出て行くという話も聞きます。前よりは講座も充実していますが、なんでもやってもらえるようになったことで、子育てサークルが逆に減少しているということも現実に起きています。社会福祉協議会を中心にネットワークを作ろうという話がありますので、交流館もこの動きに連携してほしいと思います。

委員：子育て支援センターが充実してきて、交流館からは自主グループが減ってきたということも聞きます。受身の人が増えるという状況は、さびしいことですし、わが子主義も増えています。これからの少子化は避けられない事実ですので、少子化を前提とした施策のなかで、個人の立場でもできることをやる、共にやるよ

うな支援を考えていくべきだと思います。誰もが、気持ちがすさまじいような、役割があると思えるようなことをして欲しいです。

会長：こうした調査も、システム機構の一環と思います。

委員：生涯学習は、生活に着目するのは基本なのだと改めて感じました。こうした調査が基盤になって、学校・福祉などとの関わりも生まれてきます。積み重ねながらずっとやっていくことが大事かと思います。

社会部長：何事も機が熟さないうちにやってもうまくいかないものです。新しい日本における地域・行政経営の中で、普通の人にも社会の動きが見えるようになってきました。豊田市においては、新しい地域自治の仕組みを模索する機会がやってきたのかと思います。市民本位の仕事のやり方をするためには、行政が何でもやってしまっただめで、巧妙な仕掛けが必要だと思います。これまでの行政の仕事の全部を見直し、行政の体質を変えるのが大変だと思っています。

(3) 平成20年度 豊田市生涯学習審議会の開催予定について

事務局：資料に基づき説明

3 連絡事項

・平成20年度 愛知県社会教育連絡協議会の各種研修会等の開催日程について

委員：事務局においては、表彰制度の動向に注意しつつ、事務を進めていただきたい。

審議終了 -